

推薦 田崎悦子から、はて、ショパンをかつて聴いたことはあったろうか？ 胸に手を当ててみても、それは思い浮かばない。……だが、CDを回して、遺作の《夜想曲》ホ短調（作品72-1）が流れ出たとき、私は文字どおり深く心打たれ、「これがあるいは、自分が心のどこかで待ち望んでいたショパンなのかもしれない」という気がした。その音と歌いくちとは、何かしら、人間が最後の拠りどころとするような、奥深い優しさの淵からにじみ出てくる、という気がしたのだ。心の底から弾くショパン、全身全霊で奏でるショパン、という言いかたがもし成されるならば、それは疑いもなく、このようなショパンに違いない。ただし、誤解を避けるために急ぎ言い足すなら、けっしていたずらに主情的で、ロマンティック。に過ぎるショパンではない。むしろそれとは正反対に、凛とした気品をもって、辺りを染めるほどのショパンである。ホ短調と嬰ハ短調、2つの遺作《夜想曲》を前触れに置いてのち、第3曲目から第13曲までは、すべて《マズルカ》となる。暗い曲、明るい曲、切ないもの、踊るもの……それら11篇の《マズルカ》はほぼ作曲年代を追って並べられ、彼の生涯の道筋を、彼にとつての、心のリズム。によりたどって行くかのよう。そして結びにはショパンの到達点とも、見果てぬ夢の化身とも思える2曲、《幻想曲》と《幻想ポロネーズ》が置かれる。……そしてそこに至るまで、初めに記した私の思いは消えなかった。

蜂尾昌男 ● Masao Mineo

[録音評]2010年7月の録音。録音使用機材がクレジットされているが、それに従うとベア・マイク一組のみで収録されたようである。ピアノについてのクレジットは特にないが、ないということはない。スタインウェイであろう。もしそうであるならば、少々響きが薄い印象を持った。音場感や距離感、申しぶんないが、もう少し音の角がたつてはならないだろうか。〈90〉



■ショパン/ファンタジア

〔夜想曲第19番/同第20番/マズルカ第2番/同第5番/同第7番/同第13番/同第15番/同第17番/同第32番/同第34番/幻想曲/ポロネーズ第7番(幻想)、他(全15曲)〕
 (詳細は巻末新譜一覧表参照)
 田崎悦子(p)
 [若林工房©WKPR8005]
 オープン価格

那須田務 ● Tsutomu Nasuda

推薦 いくつかのCDから田崎のピアノニズムは表面的な華やかさとは違う種類のもので、どちらかといえばウィーン古典派やドイツ・ロマン派タイプなのかなと思っていたが、やはり初めてのショパンの録音ということだ。《幻想曲》と《幻想ポロネーズ》が入っているものの、基本的にはこれは《マズルカ》集といってもいい。ショパンの初期から後期にいたる12曲の《マズルカ》を通してショパンの生涯を追うような内容になっている。入念に磨かれた音色だが、軽やかなパッセーで聴かせるタイプではない。じっくりと作品の本質を音楽の内側から引き出すタイプ。それがショパンでどのような演奏を聴かせるかはとても興味深いところ。遺作の《夜想曲》嬰ハ短調も甘い感傷を抑えたシリアスな演奏。《マズルカ》嬰ハ短調作品6の2は空虚5度の和音が印象的な作品だが、クヤヴィアクの前半も中間部の軽やかなダンスもかなり民族的な色合いが強調されている。テクスチャアの透明度も申し分ない。続いて作品7の1の楽しい《マズルカ》も同様でアゴーギクも精妙に施される。「小さなユタヤ人」と呼ばれることがある作品17の4は繊細なタッチで弾かれた前半とマズル風の中間部との対比が鮮やか。初期の作品は民族色豊かに、後期になると磨かれたソノリテと精妙なニュアンス付けで作品の持つ奥深い世界を表現している。民族的な側面は押さえられているが、むしろここから聴こえてくるのはそれを超えた普遍的な芸術作品としての《マズルカ》だ。